ジョナサン・バリ、クリストファ・ブルックス編／山本正監訳

『イギリスのミドリリング・ソート——中流層をとおしてみた近世社会——』

中川 順子

本書は、Jonathan Barry and Christopher Brooks (eds.), *The Middling Sort of People: Culture, Society and Politics in England, 1550-1800*, MacMillan, Basingstoke and London, 1994の邦訳である。ミドリリング・ソートとは、近世イングランド社会において階層を三つに分けたとき、その真中に位置する中流層、シヤニ・ドールクルーズによれば、独立して商売を営む世帯を意味する。近年、欧米では中流層（中間層と呼ぶ研究者もいる）研究が活況を呈し、その成果は枚挙にいとまがない。都市史や社会史の発展、エドワード・P・トムソンによる階級形成観、歴史学における言語論的転回などにより、これまで

の分析方法や視点が見直されたことが中流層研究興隆の背

景として挙げられる。本書はこのような背景の影響を受けつつ、さらに新しい歴史のあり方、中流層研究の可能性を探ろうとする第一線の研究者の手による論文集である。

各寄稿者は、都市の中流層が多様性を特質としながらも概ね独自のアイデンティティと利害を持った集団であったとし、イングランド近世史における中流層の重要性を活写しようとする。彼らは近世史研究においてこれまで主流であった見解——富者と貧者、あるいはジェントルマンとノン・ジェントルマン等の二分法による歴史観（もしくは、ピーター・ラスレットの提示した一階級社会論）——に疑問を投げ掛け、これに批判的な立場で論を展開している。

日本のイギリス史研究においても、中流層をめぐる論議

は大塚史学の伝統下比較的早くから撰取されてきた（我が国の研究動向と中流層研究がその中でもつ意味については訳者後書きに詳しい）。邦人による研究と欧米での研究成果の相違を再認するという点からも、本書の邦訳が出版されたことは歓迎すべきことである。

本書は次の八編の論文によつて構成されている。

序章

ジョナサン・バリー

第一章 テューダー・ステュアート朝

イングランドにおける「人びとの類い」^{ソット・オブ・ビフル}

キース・ライトソン

第二章 徒弟制度、社会的流動性、中流層、

一五五〇—一八〇〇年

クリストファ・ブルックス

第三章 ブルジョワ集団主義？——都市の結社と中流層

ジョナサン・バリー

第四章 一六世紀末から一七世紀初にかけての

専門職、イデオロギー、中流層

クリストファ・ブルックス

第五章 ロンドンにおける中流層 ピーター・アール

第六章 一八世紀における政治と中流層

ニコラス・ロジャーズ
第二章 一八世紀コルチェスタにおける
中流層——自立・社会関係・まちな顔役

シヤニ・ドゥクルーズ

本書に寄せられた論文は、いずれも中流層の重要性を示すものであるが、内容的には中流層の概念と実態を追求したものと、近世イングランド社会における中流層が果たした役割について論じたものとに分かれている。概ね、序章、第一章、第五章、第七章が前者に、それ以外の章が後者にあたる。以下では最初に各論文の内容を紹介し、次いで、問題点などを簡単に指摘したい。

序章では、各所収論文の内容紹介と同時に、中流層そのものについての説明、先行研究批判と問題意識、中流層に関する研究状況や課題が解説されている。バリーは、中産階級に言及せずとも近世イングランド社会の主要な変化は理解できると主張するジャック・ヘクスタの影響のもと、「上からの歴史」と「下からの歴史」の影に隠れ、これまで中産階級が軽視されてきた経緯を語る。バリーはヘクスタの論の問題点を丹念に見直し、さらに中流層が法的・税制的次元や経済的・政治的・文化的指標でその範囲を確定

できない存在であること。ライフ・サイクル上の社会的地位の変化において、上流階級や貧民以上に年齢や性差、地理的・社会的流動性の影響を容易に受けた者たちであったこと。中流層に政治的・社会的発展における中心的な地位を与えたのは、地域社会と国家の緊密な相互依存関係であったことを論じる。バリーは、寄稿者によって中流層概念に差異があることを認めるが、中流層の意義を評価することなしには、近世イングランド社会の理解は達成されないという信念では一致していると明言している。彼によれば、「中からの歴史」の探究、つまり単に中流層の歴史ではなく、全体として近世社会をどう特徴づけ、理解するかという点が主要なのである。

第一章でライトソンは、近世は古典的な社会階層秩序（貴族、ジェントルマン、ヨーマン……レイバラ）によってカテゴリー化された社会であるという通説を再考すべく、一連の「類い」という用語の起源や使用法の変遷、それが有する意味を当時の言説から読み解く。彼は、豊富な例を示しながら、近世イングランドの社会秩序やそれに対する意識の在り方を新たな形で明らかにする。「類い」という用語は、一六世紀後半以降一七世紀全体を通して、形容詞と

結びつくことで広く用いられるようになる。当初この語は二分法的な社会区分をその意に含み、多種多様な地域の支配者集団が自己を認識し、他者を貶めるための語であった。一六四〇年代前後から、新たに「中間（ミドル）の類い」という言葉がごく当たり前に用いられるようになり、「類い」という言葉が三分法的な意味も持つようになる。

この現象は、「中間の類い」の人々が独自の利害集団、社会の出来事に関与する集団として自他共に認識されたことと、そのことを表現する言葉が必要であったことを示している。このプロセスは「中間の類い」に更なる再編とアイデンティティの創生をもたらした。一八世紀には、「中間の類いの人々」という語と社会秩序の三分法的把握が定着する。以上がライトソンの主張である。また、ライトソンは「類い」と「階級」との連続性についても示唆している。

第二章でクリストファ・ブルックスは、中流層を扱うと同時に、近年あまり顧みられなかった徒弟制度を取り上げ、それに関する豊富な情報を提供している。従来の研究が、一八世紀における中流層内部の繁栄と社会的上昇を強調しすぎることとブルックスは警鐘を鳴らし、一八世紀に

中流層内部の伝統的な文化が変容したことを明らかにするために、徒弟制度の在り様を一七世紀の半ば以前と以後に分けて分析する。彼によれば、一七世紀末から一八世紀を通じて徒弟制度は衰退するが、その時期はこれまで言われていたよりも遅い。また、彼は、徒弟の地理的・社会的出自、徒弟制度の性格そのものが変化したことも示す。一七世紀後半以降、富や政治権力に接近することが容易な職種と同業者組合においては、中流層の社会的上昇の機会は狭くなった。中流層の価値観や文化の成立と維持に貢献した徒弟制度やギルドであったが、一八世紀にもなるとギルドはジェントルマンのクラブ化してしまう。都市エリートはジェントルマン化することが中流層固有の文化と見なすようにもなる。他方、ジェントルマンと中流層の価値観には両者の相互作用も見出しうる。中流層固有の制度であった徒弟制度の特徴をなす価値観は廃れてしまったわけではなく、徒弟奉公も昔ながらの中流層の価値観も存続したとブルックスは結論づける。

第三章では、都市における結社の研究を通じて、中流層の価値観や本質を明らかにすることが目的とされている。都市に共通する価値観がどのようなものであったか、それ

と中流層の価値観との関連についてもバリーは検証する。それと同時に、結社研究の重要性とその問題点、とりわけ史料の問題が示される。まず、バリーは、近世イングリンドを個人主義的になつていく社会としてとらえることや、一九世紀の任意団体やブルジョワジーについてのイメージを、近世の結社やブルジョワジーに適應することが誤りであることを指摘する。さらに、彼は、研究者が地主エリートあるいは民衆に目を向けるあまり、ブルジョワジーや結社が軽視されてきたことを批判する。次に、結社の成立を妨げたとされる要因、すなわちブルジョワジーの特徴であった経済的・政治的多様性や、都市の特質であった流動性こそが、結社成立を促進する要因であったことを明らかにする。ブルジョワジーにとつて結社は、ブルジョワジーに内在する多様性ゆえの分裂や衝突を回避し、自己の世帯と社会生活に安定をもたらすために、必要不可欠なものであり、彼らに規範を教え実践させる場であった。また、それは教区やギルドにみられた価値観（仲間意識や慈善、友愛等）を継承していたとバリーは主張し、新しい形態の結社と古い形態の結社が断絶していた、とする見解に再考を促す。当該時期のブルジョワジーは決して個人主義的な存

在などではなく、集團のなかに自己を見出し、そこで行動する者たちであった。都市的あるいは市民的アイデンティティは結社を通じてこそ創生、体现されたのである。ジェントリがブルジョワ文化を採用するようになり、ブルジョワジーはジェントリに従属していたわけではなかった、という論点もバリーは提示している。

第四章でブルックスは、近世の専門職は少数で（それゆえに十分に研究されることがなかった）、貴族やジェントリの利害と結びついていた点ばかりが従来強調されてきたが、その見解は見直されるべき時期にきている、と主張する。彼は近世における専門職（ここでは聖職者と法律家）を取り上げ、法や宗教に関わる彼らの言説と中流層の関係を探ろうとする。まず、専門職の数や実態、それが中流層に占める割合について概観し、続いて、当時の専門職ひいては人民にとって問題となった事項（権威や服従、権利、知の解放等）について専門職による言説を引きつつ検証する。その結果、中流層が専門職にとって、顧客であり、意識すべき存在であったこと。専門職の思考や価値観には、限界があるものの中流層を含めた人民の価値観や願望が影響していたことを示す。しかし、ブルックスは、中流層と

専門職との関係が不安定なものであったとも指摘している。

第五章では、アールが、一七世紀末期および一八世紀初頭において「中流の」や「中間の」といった表現がロンドンっ子についてはどう使われていたかを探究している。またロンドンの中流層がどのような者に該当するかについても検証している。まず、デフォーをはじめとした同時代人の記述に中流層の像を求める。彼らの記述を参考に、職業（貿易商、専門職、小売商等）や資産（動産が二、〇〇〇ポンドから三〇〇ポンドの範囲程度）・収入からロンドンでの中流層を想定する。次に、「粹（ジェンティールネス）」という属性（教育と行儀振る舞いと人柄から構成されるもの）が中流層にどうかかわるかを考察する。また、ロンドンの社会構造のなかでジェントルマンと専門職が占める地位を検討することによって、中流層の上限を確定しようとしてみる。中流層であることが静的なものではなく、ライフ・サイクルにおいてそこへと上昇したりそこから没落したりし得るものであることを示す。女性の中流層についても分析し、その数が少ないうえに彼女たちが男性以上に不安定な存在であったことを示す。様々な角度から検討した結果、

ロンドンの中流層の具体像がかなり正確に浮かび上がってくる。しかし、中流層の概念は時代ごとに変化すること、職業、収入・資産、生活様式や教育、人柄における「粹（人）」さ等、いずれを尺度にするかに応じて、中流層に含まれる者たちの範囲が流動することも明らかにされる。真の中流層なるものは層の両極の間に確かに存在するが、層の境界を確定することは困難なのである。アールは中流層と中産階級との重複性（完全ではないが）についても示唆している。あいまいな存在ではあるが、歴史家にとつては社会構造に関心を向けさせるといふ点で、また同時代人にとつては、単に社会的階梯上の特定の地位を示す以上の意味を有していたという点で、中流層には意義があるとアールは断言する。

第六章において、ロジャーズは政治における中流層の影響力と彼らの政治参加について考察している。彼は、ネイミア以来の政治史の伝統に対し、政治の場での中流層の積極的な役割を提示し、都市中心の中流層研究にあつて、農村の中流層や、国政レヴェルの政治問題についても具体例を挙げて考察する。ロジャーズは貴族・地主支配を否定はしないまでも、中流層が地元選出の議員へのロビー活動や

議会等への全国規模の請願運動を通じて、支配層に影響を及ぼし得たこと。州選挙区において、中流層に含まれる自由土地保有者が、選挙の際に独立性を保持していたことを示す史料等を提示し、地主や議員たちも選挙の時には中流層との関係に配慮しなければならなかったことを明らかにしている。選挙にかかわる一連の政治活動を通じて中流層のグループも互いに争っていた。中流層は諸団体や結社、言論界を通じて政治的な問題（主として地域的なものであったが時として全国的なものもあった）に関与するようになり、より下層の者に比べて政治参加の機会に恵まれていた。ハーバースマスが言うところの「公共空間」の拡大に関わったのも中流層であった。中流層の団結力、経済力、彼らに特有の価値観は地主のヘゲモニーを失墜させ、地域政治ひいては国政において、貴族がそのリーダーシップを無条件・無制約に行使することを不可能にした、とロジャーズは述べている。

最終章に当たる第七章では、地方都市における中流層の家業や世帯にみられるパターンと彼らの社会的関係、政治的独立性が議論の俎上に載せられる。対象は中規模地方都市コルチェスタの中流層である。ドゥークルーズによれば、

中流層とはその多くが税を納めることができる経済状態にある自立した市民であり、職住一致の世帯構造をその決定的な特徴としていた。その世帯構造こそが彼らの公的活動を支えていた。地域社会において、中流層は公的生活に關与し、政治にも高い関心を示し、互いに依存關係を形成していた。その社会的ネットワークの中心には「コミュニティ・顔役」なる人物が存在した。顔役は、中流層で重要な公職やそれに適した職業（専門職や飲食店経営等）に就いている場合が多く、選挙活動をはじめとした政治問題には、ネットワークを通じてその力をいかに発揮した。さらに、ドリクルーズは、グレイ事件や特許状取得問題という具体的な事件を例に挙げて、当時のコルチェスタでの中流層の政治関与や社会的ネットワークと政治的なそれとの関連、媒介役としての顔役の活動、政治を扱った言説と中流層の関連などについても明らかにしている。彼は、今後の研究課題として、社会的つながりと政治的なそれとが相互に及ぼし合う影響のほどや、中流層の人脈形成における顔役の重要性を正確に知ることを挙げている。

以上が各章の簡単な紹介である。各論者が取り上げる中流層に差異があるため、中流層自体についてはかなり明ら

かになったとはいえ、依然あいまいさが残る。今後は、多様性を口実に、各研究者が独自に中流層を設定するというレヴェルを克服した研究が必要であろう。また、本書には文化的なヘゲモニーの優位を中流層が握ったと見る傾向があるが、中流層の上層を中流層の典型とみなしてよいのかという疑問が残る。ジェントルマンとそれとの境界についても議論を重ねるべきである。中流層と中産階級との連続性についても、中流層のどの部分を抽出するかで見解が分かれるので、慎重に議論しなければならぬ。また、国家規模で中流層を捕捉する視座も必要だ。その点で、第六章の示唆するところは大きい。各都市（地域）の中流層を比較すればどのようなことが明らかになるのか。本書の第五章と第七章を比較、統合するような研究の登場が期待される。ナショナル・アイデンティティと中流層のアイデンティティの関連はどのように考えればよいであろうか。本書はイングランドの中流層を扱っているが、昨今盛んなブリティッシュ・ヒストリのコンテクストで中流層を扱う研究が、今後出てきても不思議ではないだろう。中流層の境界に関しては、上の境界に関心を寄せがちであるが、下の境界についても考えねばならない。中流層とそれより下層

に属す人々との関係や問題も問われるべきである。中流層という階層の重要性をことさらに強調するあまり、議論のすべてがそこに集約されて、それ以外の集団との関連で近世史を見据えることが阻害されるようなことがあつてはならないのだ。

課題点はあるが、中流層の重要性を指摘し、「中から」近世史を照射するという本書の目的は、方向付けを行うという点で達成できたのではないだろうか。中流層自体を明らかにしようとしただけではなく、結社や徒弟制度、中流層の政治関与など近世史において重要な論点を再度問い、新たな見解を導き出している点も評価に値する。第五章などは、ジェントルマンあるいは擬似ジェントルマンに関心を持つ者にとつても、意義のある考察であると思われる。いずれにせよ、中流層をめぐる議論は、研究者に共通のテーマや議論を提示し、近世史に活気を与えた。その功績は大きい。原著書出版以後、中流層をテーマにあるいはそれを意識した研究が数多くものされている。そのことが中流層研究の重要性を示すなよりの証しである。中流層研究により、近世イギリス社会についてもますます多くのことが、今後も明らかにされるであろう。

最後に、訳文についてふれておきたい。ジェンティリテイという語に随時文脈に応じた訳語をつけているが、この語は家柄の良し悪し以上の意味を内包しているのも、もう少し説明を加えた方が語の持つニュアンスを伝えることができたのではないだろうか。呉服商と服地商は原語が同じなので、呉服商に統一したほうがよいように思われる。一四二頁に出てくるシテイの市民、バラの市民は、両者を区別するならそれぞれ主教座都市の市民、自治都市の市民としたほうがよいのではないか。シテイと書けばロンドンのいわゆるシテイのような錯覚を覚えるからである。また、労働者と雇われ職人の違いを明らかにするためにも、雇われ職人にジャーニーマンと仮名をふつたほうがよい。校正上のミスと難解な文章がささやかながら見受けられたものの、「コミュニテイ・ブローカ」を「まちの顔役」と訳すなど、よく配慮された訳語の選定と丁寧な訳出により、本書はかなり読みやすいものに仕上がっている。それにもかかわらず、もし評者が読み違えや誤解を犯していれば、ご容赦いただきたい。中流層を研究する者については言うまでもなく、近世イギリス史を研究する者にとつても、本書は必携の書である。それ以外の読者にとつても、本書が

近世イギリス社会への見識を深めてくれる絶好の書であることは間違いない、一読するだけの価値は十二分にあると信ずる。

ジョン・サン・バリー、クリストファ・ブルックス編／山本正
監訳『イギリスのミドルング・ソート——中流層をと
してみた近世社会——』、昭和堂、一九九八年刊、A 5
判、二七八頁、註五四頁、本体三三〇〇円

(なかがわ じゅんこ・大阪大学大学院博士課程後期)